

## 中学校における説明的文章指導の研究

—冒頭部と結末部に着目して—

鎌倉 琢磨

### 1. はじめに

学習者は説明的文章教材の学習活動を通して、筆者の伝えようとしている知識・情報を読み取り、新しい知識・情報を得るとともに、読み取った知識・情報を自分自身の知識と照らし合わせる活動を通して、筆者とは違う視点や方法を考え、自身の認識を広げることが出来る。また書き手の文章表現を吟味・検討する活動を通して、作者の表現をこれからの自分自身の表現活動にも役立てていくことが出来る。このように説明的文章教材の学習は、ことばの教育を担う国語科の授業において、また我々の生活を営んでいくうえでも欠くことの出来ないものである。

しかしながら説明的文章教材は学習者にとって文学教材に比べて敬遠されている傾向があった。それは、「没個性的に教材を読み、確認読みで事足れり」<sup>(1)</sup>としてきた読みが行われ、意味内容の理解が第一義的に考えられ、技能・形式を習得することを目指した硬直化した授業が行われ続けてきたからである。

本論文では学習者の主体的な学習をするためには、どうしたらよいかということに観点を置き、説明的文章指導のあり方を考察していく。具体的には筆者の表現意識があらわれる叙述、とりわけ冒頭部と結末部の叙述に注目し、そこから筆者の表現意識、認識を捉え、自己の認識を深めていこうとする授業を提案していくこととする。

### 2. 研究内容

## 2.1 「筆者の叙述のあり方」に注目する指導の意義

「筆者」概念を取り入れた指導は、秋田喜三郎、倉澤栄吉、西郷竹彦、渋谷孝などによって提唱されている。彼らの指摘に共通するところは、「筆者の叙述のあり方」に注目し、説明的文章教材の内容と形式に反映される筆者の認識や表現の仕方を主体的に学ばせようとする点である。

この4者の指導の方向の先に求めている学習者の姿は、ただ情報や知識を一方向的に受け入れる「情報の受け手」としての読み手ではない。問題意識をもち筆者を評価し、批判的な視点のもと、「情報の送り手の立場」に立って主体的に読みを進めていくことが出来る読み手である。さらに筆者の問題意識が表れる「叙述のあり方」を問うことによって、「筆者はどうしてこの表現を使ったのか、こういう表現を用いてこんなことを訴えているが、それについて私はこう思う。」というように、筆者の認識の内容と方法の価値を問い、その批評行為を通して、自己の認識を鍛えることにもつないでいくことが出来る読み手をも求めているのである。

こういった「筆者」概念を取り入れた理論の検討を通して、次のような指導意義を見出せる。(2)

### ①内容主義と形式主義の止揚

「筆者」概念を取り入れた指導は、筆者の問題意識があらわれる叙述（論理、構成、文章表現）に注目し、追求していくことによって内容そのものを理解し、認識を深めていくことを目標としている。つまり、筆者概念を取り入れた指導は、内容の理解と形式を読みとることとの統一を目指している。

### ②批判読みの育成

筆者概念を取り入れた読みは、筆者という一人の個性の世界の捉え方や論理・構成の捉え方に対して、「こういう表現を用いてこんなことを訴えているが、それについて私はこう思う。」というように、批判的な読みを行い、自己の認識を鍛えていく。情報化社会では、こういった批判的な思考を活用し、情報を選択・処理・活用していくことが重要になってくる。

### ③主体的な読みの育成

「筆者」に注目する読みは、ただ情報や知識を一方的に受け入れる単なる「情報の受け手」としての読みではない。問題意識をもち筆者を評価し、批判的な視点のもと「情報の送り手の立場」に立って読みを進めていく、主体的な読みである。

## 2.2 冒頭部と結末部に着目する重要性

文章の冒頭部と結末部に着目する理由は、以下の2点である。

### (1) 先行研究から

文章の冒頭部の型やはたらきに関する諸説<sup>(3)</sup>は多くある。例えば、①文章表現の機構を論ずる立場からの冒頭論、②文法論的文章論及びその発展としての文章構成を論ずる立場からの冒頭・書き起こし論、③文章表現研究の立場からの書き出し論、④表現論的、文体論的立場からの書き出し論、⑤インシピットとしての冒頭論、⑥文章表現法、作文技術論としての書き出しの論、⑦小説作法としての書き出し論などがあげられる。

これらの指摘には差異はあるものの、冒頭・書き出し文は、展開や構築としての文章の性格から冒頭・書き出しが重視されるとともに、読者を文章の中に引き込むという、働きを持っているからこそ重要であるという点で共通している。このように考えるならば、相手意識が強い、説明的文章の場合には一層、顕著にあらわれるのではないかと考えられる。

また、冒頭部の重要性に注目した指導は、竹長吉正<sup>(4)</sup>や長崎伸仁<sup>(5)</sup>らによって行われている。それらに共通するところは、冒頭部を扱うことは、筆者に迫る上で重要な手立てとなるということである。こういった点においても、冒頭部に注目することの意義が見出せると思われる。

なお、冒頭部のみに注目するのではなく、冒頭部と関係の深い結末部に注目し、考えていくことも重要であると思われる。それは以下に示す冒頭部と結末部との関係を見ても明らかである。

### 【具体例】

「流れ橋」(教育出版 中2)をもとに実際に「筆者」に迫ってみたい。「流れ橋」は中学二年生を対象としたもので、内容として

は京都にある上津屋橋を例として取り上げ、「流れ橋」のように自然の流れに身を任せて我慢し、自然との調和を図っていく必要があるというメッセージを伝えようとしたものである。

まず文章の冒頭では京都にある上津屋橋は、大水が来れば流されるので「流れ橋」と呼ばれるようになったという由来があげられ、続けて「流れ橋」は、どうして流れないような頑丈な橋にしないのでしょうかと、問題提起の文で始まっていく。その謎を証明するために、「架かっている場所の説明と架けられた理由」→「流れ橋の構造」→「流れ橋の利点1」（自然の流れに身を任せて我慢する）→「流れ橋の利点2」（木材を節約する）→「自然との付き合い方の提言」といった展開で構成されていく。

では、この教材の冒頭部と結末部に着目することによって、どのような筆者の認識、表現意識が読み取れるのであろうか。

まず注目すべきは、冒頭部で取り上げられた「流れ橋の由来」についてのエピソードの役割である。ここでは「流され」という語句を5回用い、「流れ橋」に対するマイナスイメージを強調する形になっており、学習者の既有意識を揺さぶり意表を突く大胆な内容を含んだものとなっている。そしてこの謎を解くことを中心に論は展開していき、結末部で『流れ橋』は自然に身を任せながら我慢する橋である」という存在意義をあげ、だからこそ、これからはこのような自然との付き合い方が必要であるという形で終わっている。冒頭部で読み手の意表を突いた話題は、最後になって再び意外な話題・主張となって読み手に突きつけられるのである。そうすることによって、実は流されることに「存在意義」があるんだということを一層印象深くし、筆者の主張を強める形となっている。また、結末部について言えば、最後は「この流れ橋の姿にはわたしたち人間が自然とどのように付き合ったらよいか、一つの考え方が示されているのではないのでしょうか。」という、やや含みを持たせた文で締めくくられている。これは「流れ橋のような自然との付き合い方が必要である。」という一つ前の文を受けて、この提案は受け入れるか、受け入れないかはあなた達自身の問題であるということを考えさせるために、含みを持たせた言い

方としているのではないかと思われる。

このように、先行研究から得られた知見は有意性があるとともに、冒頭部と結末部との関係を注目することは筆者に迫っていくうえでも重要なものとなる。

## （２）実態調査から

ここでは、中学校の光村図書の平成１４年度版、平成１８年度版の説明的文章教材から２１教材を取り上げ、「冒頭部の種類」、「冒頭部の内容」、「結末部の種類」について観点<sup>(6)</sup>を設けて分析した。（番号は脚注に示しているものを指す。）

### 【冒頭部の種類と内容】

冒頭部の書き出し方は、「②主要な題材・話題について述べる。」が最も多く、続けて「①主題・要旨・結論・提案などを述べる。」、「⑦本題に入る前にまくらを置く。」、「⑨本題を構成する一部としての冒頭」、「④筆者の態度・意向・執筆態度などを述べる。」が多い結果となった。これは、冒頭部において「話題、結論、筆者の態度」で書き出すことによって文章全体の性格や方向を示すとともに、読者に興味を持って文章に引き込もうとした筆者の表現意識があるからであろう。また、冒頭部で述べられた内容は、学習者にとって先行知識もなく経験もないといった「未知」のものは少なく、書きだし・冒頭部で述べられた内容が、どの学習者にも先行知識や経験がある程度はあり、それをもとに未知のものへと読み進めていくことが出来るといった、「既知→未知」のものが多い。

冒頭部は、そのことに関してすでに知っていること、考えられることを意識に浮かばせ、興味・関心を引き起こすことも可能であり、また、冒頭部分に示された話題、課題に着目させて読み手の題材意識を方向付け、書き手の課題・問題意識に同化させていくことも可能であるのである。

### 【結末部の種類】

結末部の書き終わり方は、「①主題・要旨・結論・提案などを述べる。」が最も多く、続けて「⑦本題を構成する一部としての結尾」、「⑥本題と関連のある事柄や感想などを、つけたりとして添え

る。」が多い結果となった。これは結末部において今まで述べたことを踏まえて主張することによって、読者に対する印象をより際立たせようという筆者の表現意識があると思われる。また、冒頭部と結末部との関係で見ると、冒頭部と結末部との呼応関係がみられる教材は21の教材中、15にものぼり、今回の対象教材ではほとんどの教材でみられることになった。また呼応のパターンをみてみると、パターン1「②主要な題材・話題について述べる。」→「①主題・要旨・結論・提案などを述べる。」と、パターン2「①主題・要旨・結論・提案などを述べる。」→「①主題・要旨・結論・提案などを述べる。」の2パターンがあることが明らかになった。

冒頭部と結末部の呼応関係がみられないものは少なからずあるが、結末部は冒頭部と関係の深い箇所であり、冒頭部、結末部の呼応関係に着目していくことは、筆者の表現意識、認識を捉えていくための手立てとなることが明らかになった。

## 2.3 実践的指導の提案

### (1) 授業の方向性

本授業のねらいは、筆者の表現意識、問題意識があらわれる叙述、とりわけ冒頭部、結末部の叙述に注目し、筆者の認識の内容と方法を問うことによって、自己の認識を深めていくことが出来るということを確認することである。具体的には、冒頭部への興味を深めながら、冒頭部で述べた内容に対して自己の経験を重ね合わせ、読み手の題材意識を方向付け、書き手の課題・問題意識に同化させていく。そして冒頭部と結末部を合わせて読ませ、書き手はどのように内容を展開してその結末に至るのかという問題意識のもとに結末をめがけて読み進ませていくというものである。

文章を普通の読み方で順々に読ませるとすれば「冒頭部」→「展開部」→「結末部」となるのであろうが、それを意識的に「冒頭部」→「結末部」→「展開部」<sup>(7)</sup>というように読ませていくようにするのである。

そうすることによって、冒頭部の重要性や冒頭部と結末部との

呼応関係が強調されるとともに、そこから筆者の問題意識を支える展開部へと読みを進めていくことが可能となるからである。そして授業の最後には、筆者の認識、表現意識、問題意識に対する自分の考えをもたせ、発表し合う活動を設定する。

## (2) 授業実践の結果

今回は時間の関係もあり、重要な部分である、冒頭部と結末部にふれる1時間のみを扱った。授業を行った結果として、以下の方向性を示すことが出来た。なお、扱う教材は先にあげた「流れ橋」を用いることにした。

### 【事例1から】

本授業の導入段階では、「流れ橋」という題名から、どのようなことを想像することが出来るかや、「流れ橋」について知っていることについて確認した。この段階では「流れ橋はゲームでしか見たことがない」といった指摘にとどまり、筆者の書いたであろう内容について予想した発言をする生徒は見られなかった。しかしながら、冒頭部の五つの文を読んだ際、次のような反応が見られた。(網かけの部分は指名して冒頭部の部分を読ませている。)

26	A/生	大水が来ても、流されない。頑丈な橋がいいと考えます。それなのに、京都にある…、かみ…
27	教師	//こうづやばし。
28	A/生	上津屋橋という橋は、大水が来て川の水がいっぱいになると、必ず流されてしまいます。
29	生徒	(笑う) あほだ。
30	A/生	もちろん、流されるたびに修理はするのですが、それでも大水が来れば、また流されるのです。
31	生徒	(笑う) 全然ダメじゃん。
32	A/生	ですから、付近の人々は、この橋のことを「流れ橋」と呼んでいます。ところで、この流れ橋は、どうして流されないような頑丈な造りにしないのでしょうか。

ここで注目すべきは、題名について発問した際には何も思い浮かばず意見が出せなかった生徒が冒頭部の文を読んだ際に、冒頭

部の内容に対して29, 30のような「笑う」という反応を示しているということである。これは、題名読みで「流れ橋」について知識もなく、興味を引きつけられなかったと思われる生徒が、書き出しの5つの文を読むことを通して、内容を具体的に理解することで、話題に対して興味を持ち、自分との接点を見出したからこそ、「笑う」という興味を示すことになったのではないかと考えられる。冒頭部を読むことによって題名から想像できなかったものを補い、既有知識が揺さぶられ、興味を持って読みを進めていくことが出来たということであろう。したがって冒頭部は抽象的な「流れ橋」という題名を補うとともに、内容理解を助け、読者の興味を引き起こす重要な箇所であることがこの一例から読みとることが出来る。

【事例2から】

冒頭部に対する印象（題名との関係、表現、組み立て、その他）について考えさせた後、冒頭部と結末部の関係について気づいたことを学習カードに書かせた。すると以下のような結果が出た。（番号は教材文を一文ずつ区切った際のもの）

種 類	数
① 冒頭部1～4では、流れ橋は普通の橋と比べて良くないようなことを言っているが、結末部49では、実は流されることに流れ橋の存在意義があるということを主張している。そして結末部50で私たちに流れ橋のような自然との付き合い方を提案している。	26
② 5の問題提起の答えに当たる部分が45, 48の文になっている。その答えを踏まえた上で、49, 50の文で、人間と自然との付き合い方についての筆者の考えをあげている。	5
③ 5の問題提起を49, 50の結びでまとめている。	3

冒頭部1～4と49, 50との関係に気付いた生徒は26人で、大多数の生徒が冒頭部と結末部の呼応に気付いた結果となった。具体的な記述内容としては、冒頭部の、「流される」というマイナ



ス面と、結末部49の「流されることによって自然の猛威を我慢する」というプラス面に注目し、結末部50の「自然との付き合い方を考えなければいけないという筆者の提案」をおさえていた。

これは、マイナス→プラスという冒頭部と結末部の落差が強く印象付いた結果であろう。確かに、この問題を考える前に、5の問題提起の文と45～48の文を確認した上で取り組んだこともあるので冒頭部と結末部の関係について考えやすくなっていたであろうが、冒頭部に対して印象（題名との関係、表現、組み立て）を抱き、読み手の題材意識を方向付け、書き手の課題・問題意識に同化し、結びへの読みに至ったため、このような結論を導くことが出来たのでありたいと思われる。

授業を終えての感想でも大半の生徒が、「書き出しと結びを読むことによって、大まかではあるが話の内容がつかめることに気付けたし、筆者の工夫があることにも気づいた。書き出しと結びは関係が深いということを感じた。」という感想を残している点から見ても、冒頭部と結末部に着目した読みが有効であったと言えるであろう。

### 3. 研究の成果と課題

#### 3.1 成果

- ① 内容主義か形式主義という問題は、内容と形式に反映される「筆者の問題意識があらわれる叙述」、とりわけ「冒頭部、結末部の叙述のあり方」に注目していくことによって、止揚することが出来る。
- ② 冒頭部に注目することによって、興味・関心を持たせることが可能であるとともに、冒頭部分に示された話題提示、課題・問題提示の文に着目させて読み手の題材意識を限定し方向付け、書き手の課題・問題意識に同化させていくことも可能である。
- ③ 冒頭部に注目し、結末部との呼応関係を捉えていけば、筆者の認識、表現意識にふれることが出来る。

### 3.2 今後の課題

- ①「物語の文章でも書き出しと結びに注目する読みが可能であるか」、といったような授業を通しての生徒の反応があるように、文学における書き出しと結びの関係や、書き出しと結びに注目した読みをどのように学習者自身の表現活動へ生かしていくことが出来るのかといったような、書き出し・結びに着目した、応用、発展的な指導を考えていく必要がある。
- ②今回は冒頭部と結末部に触れる導入の一時間を扱ったのであるが、2時限目、3時限目と続けていく上で、どのような読みが行われていったのかということ进行分析できなかった。今後は冒頭部と結末部を扱うことによって、どのように読みが変容していったのかということ进行分析する必要がある。同時に、生徒からの反応に見られたような問い（「文章を段落に分けて流れを理解していく方法と、書き出しと結びに注目してから文章を理解していく方法とでは、どちらの方法が文章をよりわかりやすく理解していけるのか」ということを解決していくためにも、より多くの実践を通して他の指導法との比較を行い、分析していくことが必要となってくる。
- ③本研究では筆者の問題意識や認識があらわれる叙述、とりわけ冒頭部、そして結末部の叙述に注目し、筆者の認識の内容と方法を問うことによって、自己の認識を深めていくことが出来るのではないかという方向性を示唆した。

しかしながら冒頭部と結末部とが呼応しない教材を本研究では扱うことが出来なかった。また、本研究では冒頭部と結末部の書き出し方・書き終わり方の種類、呼応の関係について考察を進めてきたが、今後は文末表現、修辞といった面にも視点をすえて考察していく必要がある。

#### 【注】

---

(1) 森田信義 「説明文による論理体験を」 (引用は『教育科学国語教

- 育』449号 明治図書 1991)
- (2) 指導意義は、秋田、倉澤、西郷、渋谷などの論の検討や河野順子(『対話』による説明的文章の学習指導—メタ認知の内面化の理論提案を中心に—) 2006・2 風間書房)の論の検討を踏まえてまとめた。
- (3) 木坂基 「書き出しと結びの型—基本と応用」(引用は『国文学 解釈と教材の研究35巻15号』1990・12 学灯社による)木坂は、冒頭・書き出し論を(1)文章表現の機構を論ずる立場からの冒頭論、(2)文法論的文章論及びその発展としての文章構成を論ずる立場からの冒頭・書き起こし論、(3)文章表現研究の立場からの書き出し論、(4)表現論的、文体論的立場からの書き出し論、(5)インシビットとしての冒頭論、(6)文章表現法、作文技術論としての書き出しの論、(7)小説作法としての書き出し論に分けて説明している。
- (4) 竹長吉正 『説明文の基本読み・対話読み 中学校編』1996・10 明治図書 竹長は、情報化社会に対応した読みが必要であるとし、基本読みの指導過程として「冒頭部→結末部→過程部」という読みの重要性を提唱している。
- (5) 長崎伸仁 『新しく拓く説明的文章の授業』1997 明治図書 長崎は、冒頭部、結末部は重要な役割をもっているとし、これらに着目する読みは、ことがら読みや内容理解を主とした読みの学習から脱皮するための手立てとなるとしている。
- (6) 調査の観点としては以下の通りである。  
【冒頭部の種類】(引用は市川孝『国語教育のための文章論概説』1988 明治図書による。)

- (i) 叙述内容の集約としての冒頭①主題・要旨・結論・提案などを述べる。②主要な題材・話題について述べる。③あら筋・筋書きを述べる。
- (ii) 本題に対する前置き導入としての冒頭④筆者の態度・意向・執筆態度などを述べる。⑤本題の内容を規定し、本題に枠をはめる。⑥導入として、時・所・登場人物を紹介する。⑦本題に入る前に「まくら」を置く。⑧本題に対して対比的な内容を述べる。
- (iii) ⑨本題を構成する一部としての冒頭 (前置きや導入を置かない。)

【冒頭部の内容】

- ① 既知…書きだし・冒頭部で述べられた内容は、どの学習者にも先行知識や経験などがある。
- ② 未知…書きだし・冒頭部で述べられた内容は、学習者にとって先行知識もなく経験もない。
- ③ 既知→未知…書きだし・冒頭部で述べられた内容は、どの学習者にも先行知識や経験がある程度はあり、それをもとに未知のものへと読み進めていく。

【結末部の種類】(引用は市川孝『改訂文章表現法』1975 明治図書による。)

- (i) 叙述内容の集約としての結尾①主題・要旨・結論・提案などを述べる。②主要な題材・話題について述べる。③あら筋・筋書きを述べる。
- (ii) 本題に対するついたりとしての結尾④筆者の態度・意向・執筆態度などを述べる。⑤本題の内容を規定し、本題に枠をはめる。⑥本題と関連のある事柄や感想などを、ついたりとして添える。
- (iii) ⑦本題を構成する一部としての結尾
- (7) 先にあげた竹長の論をもとにする。

【参考文献】

- 『国文学 解釈と教材の研究 35巻』 1990・12 学灯社  
市川孝『改訂文章表現法』 1975 明治図書  
市川孝『国語教育のための文章論概説』 1988 明治図書  
河野順子『〈対話〉による説明的文章の学習指導—メタ認知の内面化の理論  
提案を中心に—』 2006・2 風間書房  
竹長吉正『説明文の基本読み・対話読み 中学校編』 1996・10  
明治図書  
長崎伸仁『新しく拓く説明的文章の授業』 1997 明治図書

(かまくら たくま 2006年度大学院修了)